高廣凡子（たかひろなみこ）

学位の種類　博　士（国際文化）

学位記番号　国博　第　40　号

学位授与年月日　平成16年9月22日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻　東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期3年の課程）
国際地域文化論専攻

学位論文題目　アメリカ合衆国における「ブラック・プリズン・ムーブメント」の発生と展開
―― 1960年代後半から1970年代初頭を中心に ――

論文審査委員　（主査）
教授　竹中興慈　　教授　井川眞砂
教授　北川誠一
助教授　小原豊志
助教授　落合明子

論文内容の要旨

序章
第1章　ベイエリアのブラック・パワー運動
第2章　ブラック・パワー運動の波及と囚人社会の変容
第3章　異人種間連帯としてのBPMの発生
第4章　BPMの展開と主体化する黒人囚人
終章　BPMと「黒人公共圏」

序　章

本研究の目的は、1960年代後半から1970年代初頭のアメリカ合衆国の主としてカリフォルニア州を中心に、ブラック・プリズン・ムーブメント（Black Prison Movement：以下、BPMと略す）と呼ばれる黒人囚人による刑務所改善要求運動をアメリカ黒人運動史に位置づけ直し、その歴史的

意義を「黒人公共圏」という観点から考察することにある。

1960年代後半から1970年代初頭にかけて、カリフォルニア州において2つの黒人運動が発生した。1つはブラック・パワー運動（Black Power Movement）であり、いま1つはBPMである。ブラック・パワー運動とは、カリフォルニア州においては主にベイエリアと呼ばれる地域で展開した急進的な黒人運動である。他方、BPMは、一般的に「プリズン・ムーブメント」として知られる1960年代後半から1970年代初頭に発生した囚人の刑務所改善要求運動の中でも、黒人囚人が主体となって展開させた運動を指す。BPMは、この時期以外に発生した刑務所内騒擾が単に「暴動」とみなされたのに対し、刑務所史上で唯一「運動」と捉えられてきた。それは、1つにはBPMが社会的不平等や差別の是正までをも運動の射程としていたからであり、いま1つには当時隆盛していた新左翼運動と関係性を有していると考えられたからであった。特に、黒人囚人が主体であるBPMがブラック・パワー運動と同時期に発生したという事情から、従来の行刑研究分野における研究は、2つの運動の関係性を無批判に自明視し、2つの運動が同質性を有するものであると捉えてきた。また、BPMは、黒人運動という観点からも言及されてきたものの、実証的に主題として検討されてきたとは言い難い。

具体的で実証的なBPM研究の蓄積がほとんどない中、近年、黒人研究では黒人の研究者ヒューストン・ベイカー（Houston A. Baker, Jr.）が次のような重要な提言を行った。それは、マーティン・ルーサー・キング（Martin Luther King, Jr. 1929-68）主導の南部公民権運動の中で、それまで白人による黒人支配のために利用されてきた装置としての刑務所が、黒人の自由を達成する空間として転換され、利用されることで、公共的性格を帯びた、という指摘である。南部公民権運動において刑務所を利用したこの運動は「ジェイル・イン」運動と呼ばれる。ベイカーはBPMを「ジェイル・イン」運動と連続性を持つものと捉え、BPMに公共性を見出そうとした。彼は20世紀半ばの黒人運動における刑務所を、「黒人公共圏」として位置づけ直そうとしたのである。しかし、「黒人公共圏」は黒人の人種的利害によって公衆を分断しかねない自己矛盾を孕んでおり、「黒人公共圏」の議論は、それを克服する有効な理論の導入なく展開してきた。

本研究では、「人種」に着目しつつ、従来の研究で自明視されてきた刑務所内外の関係性を実証的に検証することで、黒人囚人が主体として立ち上がってくる過程とBPMの自生的展開を明らかにし、アメリカ黒人運動史におけるBPMの意義を、「黒人公共圏」という観点から探ってゆく。かかる考察によって、現代合衆国における多文化主義批判に対して具体的反論の事例を提示することを目指す。

第1章　ベイエリアのブラック・パワー運動

南部公民権運動最後の大規模なデモ行進が行われたミシシッピ州を発祥の地とした「ブラック・

パワー」というスローガンは、1966年9月、カリフォルニア州にその提唱者で黒人活動家のストークリー・カーマイケル（Stokely Carmichael 1941-98）と共に到来した。これによって、カリフォルニア州ベイエリアにブラック・パワー運動が発生した。

ブラック・パワー運動は、ブラック・ナショナリズムという観点からその運動の思想が体系的に論じられるか、あるいは地域研究という観点から研究がすすめられてきた。カリフォルニア州に関しては、同州に本部を置いていた黒人の自衛組織ブラック・パンサー党（Black Panther Party、1966年創設）を中心とした組織やその活動の「実態」を、機関紙や手記など、ブラック・パワー運動に内在した史料から解明することが研究の主流になっているといってよい。本研究では、刑務所との関係性という観点から、白人の発行した、新左翼運動の一翼を担ったアンダーグラウンド新聞『バークリー・バーブ』*Berkeley Barb* を中心に、カリフォルニア州におけるブラック・パワー運動の歴史的性格を実証的に探った。その結果、ブラック・パワー運動が刑務所と関係性を有するに至る過程と関係性の具体的内容を解明することができた。

ブラック・パワー運動は、従来、ブラック・ナショナリズムを思想的な基盤として、白人との「分離」を主張した急進的黒人運動であると捉えられてきた。ブラック・ナショナリズムとは、合衆国国内のみならず第3世界の黒人同士の連帯意識の基盤となった思想である。しかしながら、ベイエリアのブラック・パワー運動は、ブラック・ナショナリズムを強く主張しながらも、「特定の目的のための特定の連帯」という戦略の下、白人と「連帯」して運動を行っていたことが明らかとなった。白人社会への「統合」を目指した公民権運動への批判を含んだブラック・パワー運動は、その出発点において、「統合」と「分離」の間にある道を模索していたのであった。それは、一方でブラック・ナショナリズムによって黒人コミュニティの「建設と強化」を図り、他方で「ブラック・パワー」獲得のために白人と共闘するという道であった。ベイエリアのブラック・パワー運動にとって一時的な白人との「連帯」は、黒人コミュニティの「永久的な」自律を保証する手段だったのである。

かかる特徴を有するベイエリアのブラック・パワー運動を嚮導していたのは、ブラック・パンサー党であった。ブラック・パワー運動は、白人との「連帯」を戦略として、刑務所の問題へと関わってゆくこととなる。そのきっかけは、1966年のブラック・パンサー党結成後まもなくして、同党とブラック・パワー運動の「シンボル」であり、党の創設者であったヒューイ・ニュートン（Huey Newton 1942-89）が警官殺害の罪で逮捕された事件であった。黒人にとってニュートンの逮捕は黒人に対する「体制」の不正義を収斂した事件であったため、ニュートンは、「体制の不正義によって投獄された犠牲者」であり、「社会が理不尽であることを声に出していうことのできる」「政治囚」とみなされた。「政治囚」は、特に、「体制の不正義によって投獄された」黒人を指して使われたが、ブラック・パワー運動が白人との「連帯」を否定していなかったため、多くの白

人が「政治囚」たるニュートンの釈放運動に参加した。ニュートンの逮捕以来、「政治囚」の解放が、ベイエリアのブラック・パワー運動とパンサー党の運動の中心的な活動目的となってゆく。と同時に、「政治囚」というレトリックが人々の間に浸透していった。皮肉にも、ブラック・パンサー党員が「政治囚」の表象や刑事司法システムの犠牲者となればなるほど、徐々に刑務所や囚人自体が外部社会に可視化してゆくこととなった。

このようにして、刑務所問題への取り組みはブラック・パワー運動の核心となっていったが、白人と「連帯」することによって、囚人支援の輪は、ブラック・パワー運動という枠を超えて、白人組織や白人弁護士などにまでより大きく広がることとなった。ブラック・パワー運動は、ニュートン事件をきっかけに、刑務所と囚人の問題を紐帯として、異人種の人々を構成員とする瞬間的で暫定的な「共同体」を形成したといえよう。しかし、ブラック・パンサー党は、白人との瞬間的な「共同体」の中でさえ「黒人性」を強調しすぎ、ニュートンをはじめ、党の幹部の逮捕、拘禁という事態に直面して、BPM へ介入するときに、「政治囚」の解放だけを党としての運動目的としてゆく。そのことが、後に、囚人たちによって BPM を形骸化する「思い上がった要求」と捉えられる要因となったのであった。

第2章　ブラック・パワー運動の波及と囚人社会の変容

ブラック・パワー運動と BPM の関係性は、刑務所内部においては黒人活動家の表象によって確立されたといえる。つまり、ブラック・パワー運動の刑務所内への波及が、BPM 発生の素地を形成した。

ブラック・パワー運動によって刑務所と囚人が外部社会に可視化すると同時に、ブラック・パワー運動は刑務所内に思わぬ波及をもたらしていた。黒人囚人がブラック・パワー運動の急進的活動家の表象となることで、特に黒人囚人に対して刑務所の処遇が悪化することとなったのである。ブラック・パワー運動の急進性によって、黒人囚人は刑務所内で刑務所外部の急進的な活動家と同一視され、刑務所当局側にとって黒人囚人は「単なるニガー」から「銃を持ったニガー」の表象へと変化したのである。外部の活動家と同一視された黒人囚人は、「刑務所内での騒ぎを促進するかもしれない」として、予防的に処罰を受けた。また、黒人囚人が刑務所内で目につく存在となってきたことによって、「人種」が、刑務所内の「秩序」維持に利用されるようになった。看守は黒人囚人と白人囚人の間に、当局側への抵抗に結びつくような連帯意識を芽生えさせないよう、2つの人種の関係を故意に悪化させたのであった。

しかしながら、かかる状況が逆に、黒人囚人が当局側への抵抗を戦略的におこなう契機ともなった。看守の人種主義や白人囚人との対立という状況の中で、黒人囚人たちはブラック・パワー運動に影響を受けた。なかでも黒人囚人に甚大な影響を与えていたのは、「政治囚」という言葉であっ

た。囚人は「政治囚」というイデオロギーを積極的に受容し、同時に外部の活動家が使うレトリックを口にするようになった。このように政治化した黒人囚人たちは、白人囚人との敵対関係を当局側に対する抵抗へと変化させる反抗の契機を窺った。人種的抑圧という逆境の中で、黒人囚人は、「政治囚」という言葉が収斂していた、「反白人」ではなく「反体制」というイデオロギーを受容し、当局側に対抗しうる「囚人階級」の連帯を模索したのである。このことがBPM発生の契機となった。

従って、これまで自明視されてきた2つの運動の関係性は、ブラック・パワー運動が囚人に対して一方的に影響を与えたということにあるのではなく、ブラック・パワー運動が刑務所社会全体へ波及したこと、及びそれによって形成された刑務所の特殊な状況がBPM発生の契機となった、という点にあったのである。それは、ブラック・パワー運動の影響と人種的抑圧によって人種アイデンティティを強く意識せざるを得ない状況の中で、かかる人種的抑圧に対抗するために、黒人囚人が人種性を保持したまま、異人種と真に協力しなければならないという黒人囚人の置かれた特殊な状況であった。

第3章　異人種間連帯としてのBPMの発生

本章では、1968年から1970年にカリフォルニア州立サンクエンティン刑務所（San Quentin State Prison、1852年創設）で発生した「プリズン・ムーブメント」とBPMを事例に、その歴史的性格を解明した。

1968年1月から約1年かけて、サンクエンティン刑務所の囚人たちは刑務所改善に関する報告書、いわゆる「囚人レポート」を作成し、刑務所改善の努力を行った。この囚人たちの努力は、カリフォルニア州における「プリズン・ムーブメント」の口火を切った重要な運動であった。しかし、その一方で、「囚人レポート」作成による囚人たちの刑務所改善の努力は、第1に異人種の囚人間の「協力」関係が非常に限られたものであった点、第2に刑務所外部との希薄な関係性といった課題を残すこととなり、それ以後の「プリズン・ムーブメント」とBPMはこれらの課題を克服してゆくこととなった。

この刑務所改善の努力と平行して行われた2月と8月のストライキの意義は、刑務所内外の情報網の確立、及び外部支援の獲得にあったといえる。

2月に決行したストライキという示威行動で初めて、囚人たちは、刑務所内で違法に発行していた『アウトロー』*The Outlaw*というアンダーグラウンド新聞を、『バークリー・バーブ』に転載するという戦略によって、刑務所内部の不正義を外部社会に対して可視化しようと試みた。1968年に発生した2つの運動は、主に外部との関係性の確立と発展という観点から、その展開を確認することができる。2月のストライキで囚人たちは、外部支援者に対して、刑務所改革が行われるよう、

刑務所運営に関係のある外部社会のシステムへの圧力を要請したのであるが、外部支援者は囚人たちのストライキ支援の呼びかけに応じたものの、そこに抗議行動以外の具体的な目的や行動はなかったといえる。これはカリフォルニア州で初めて可視化した刑務所や囚人の問題に対して外部社会の組織間に一様な意見がなかった、つまり、刑務所外部支援者や組織には支援していることを囚人たちに示す以外に、囚人をいかに支援すべきかについての具体的な方策がなかったことを表していた。しかし、8月のストライキでは、外部支援者たちへ「刑務所外部からシステムに対して」圧力をかけるよう促す囚人たちの働きかけが奏功していた。また外部社会における囚人の「政治囚」としての現れも手伝って、刑務所の問題は、刑務所外部のパンサー党のような人種マイノリティの権利獲得を目的とした組織の活動目的となっただけではなく、例えば囚人の権利保護組織が設立されたように、支援者にとって刑務所の問題解決が組織の存在意義にさえなったのである。

「プリズン・ムーブメント」の揺籃期におけるサンクエンティン刑務所での刑務所改善の努力は、外部支援の獲得を主目的としていたといえる。外部支援の獲得は、刑務所の歴史の中で、次のような意義をもっている。すなわち、「言説から排除され、発言から排除された」囚人が、発する言葉を受け取る他者を獲得することによって、言論空間を主体的に創出したのである。このことは、監視するものとされるもの以外の第三者が刑務所という閉鎖的な場に介入する契機を形成していた。これは刑務所改善にとって1つの前進であったといえよう。

しかし、その後黒人囚人が黒人にだけ加えられる差別的処遇に対して抗議の声をあげなければならなかったことを見ればわかるとおり、1968年の「プリズン・ムーブメント」はカリフォルニア州の囚人全体の状況改善のために行われたにもかかわらず、すべての囚人に正義をもたらす試みではなかったといえる。黒人囚人は、黒人という人種に加えられる差別的処遇に抗議して行動を起こさなければならない状況に立たされていた。すなわち、「プリズン・ムーブメント」はBPM発生の契機を孕んでいたのである。

黒人囚人が人種的利害を反映した要求を提示し、運動の中で可視的な存在となるには、1970年8月のストライキを待たねばならなかった。それは、刑務所内の黒人に差別的な処遇を外部社会に可視化した、黒人囚人主体の運動であった。ストライキの主導者がブラック・パワー運動のレトリックを借用し、刑務所内部の状況に合わせて変容させることによって、このストライキは黒人だけをまとめるものではなく、異人種間の連帯を試みるものとなったのである。その際に使用されたスローガンは「ブルー・パワー」であった。外部社会で「ブラック・パワー」という言葉は人種性を強調し、黒人という人種の連帯意識の基盤となったが、「ブラック・パワー」を模したスローガン「ブルー・パワー」は、囚人の「階級」連帯のスローガンとなった。このことによって、1970年8月のサンクエンティン・ストライキは異人種間連帯の達成を試みながら、黒人囚人の言論空間を確立した特質すべき運動として捉えられるのである。

また1970年になって囚人の権利保護団体やパンサー党などの外部組織と囚人たちとの関係も変化していた。1968年の2回のストライキが刑務所外部に刑務所問題解決への支援を訴えかけなければならなかったのに対して、1970年8月のストライキは、囚人への不正義に対する刑務所外部組織による抗議行動を契機としていたと捉えることができる。このことは、囚人が支援を訴えかけるまでもなく、外部組織が刑務所内部の動きとは自律的に刑務所の問題に取り組み続けていたことを表している。外部組織にとって刑務所問題の解決が明確に組織の運動目的と結びついていたのである。さらに刑務所内部でも囚人たちは、刑務所外部で発生した自律的な、刑務所の不正義に抗議する運動に乗じて行動を起こしたため、刑務所内の運動は自生的展開をみた。刑務所改善に際して、囚人たちは刑務所外部に支援を呼びかけなかったのである。刑務所外部が恒常的支援組織の設立などによって囚人たちとは自律した運動を展開していたため、外部支援の獲得はもはや運動の目的ではなくなりつつあった。代わりに刑務所内では異人種の「囚人階級」連帯が重視されていった。

第4章　BPMの展開と主体化する黒人囚人

本章では、1970年8月のサンクエンティン・ストライキにおいて発生したBPMが、その後フォルサム刑務所とニューヨーク州アッティカ刑務所へいかに継承し、展開したかを検討し、その歴史的意義を明らかにした。サンクエンティン・ストライキで指導者と目された囚人たちが、フォルサム刑務所へ移送され、同年11月に発生したフォルサム刑務所での全囚人が参加したストライキの中心的役割の一部を担っていた。またその後のニューヨーク州アッティカ刑務所での刑務所改善運動で提出された要求書は、フォルサム・ストライキで使用された要求宣言書をその雛形としていた。本章では、各刑務所や地域を越えて展開し、発展していくBPMを、統一的に関連づけて検討し、BPMの歴史的展開を再構築した。

1970年11月のフォルサム・ストライキは、従来、「労働組合主義の発露」を見いだせる重要なストライキとして位置づけられてきたが、それに先立つ前年9月の未遂に終わったストライキ計画の中で、既に囚人たちは「奴隷労働の廃止」など「労働」に関する要求を当局側に提示する準備をしていた。フォルサム・ストライキには明らかに刑務所外部の労働組合の影響があり、このストライキを契機として、刑務所外部に囚人のための労働組合が設立されたことは確かであった。しかし、労働組合と囚人の関係を詳しく検討すると、ストライキという囚人たちの「労働組合主義の発露」が囚人組合の設立に単純に結びついたものではなかったことがわかる。またこのストライキ以後、刑務所内で、人種主義の撤廃を明示的に主眼とした動きが起こってきたことを鑑みると、「人種」を不問に付してこのストライキを検討することはできないと考える。

フォルサム・ストライキが評価されるべき点は、労働組合の結成だけにあったのではなかった。「人種」に注目してみると、囚人が異人種間連帯の下に、主体的に公然と「人種主義」に抗議の声

をあげたことこそがフォルサム・ストライキの意義であったといえる。刑務所外部ではブラック・ナショナリズムによって、白人と黒人のみならず、ブラック・パワー運動内部の黒人活動家すら分裂しつつある時に、刑務所では真の異人種間連帯を達成した自生的な運動が展開したのであった。

しかし、フォルサム刑務所の囚人たちは、外部組織の「思い上がった要求」によってフォルサム・ストライキが「失敗」した、と認識していた。このことから教訓を得た囚人たちは「囚人同志」の一致団結の強化に努めることで、刑務所内で運動は自然と人種やイデオロギー的差異を超えるものとなっていた。彼らの要求はただ、「人種主義を撤廃すること」であった。ここで、撤廃されるべきものが黒人差別ではなく「人種主義」であったのは、「人種主義」が刑務所内では抽象的な概念では全くなく、またそれが刑務所内では黒人のみならず白人や、他のマイノリティにとっての問題でもあったことに起因している。「人種主義」とは、「メキシコ系アメリカ人の間に黒人に対する反感を煽り、白人の間にすべての囚人に対する反感を煽ろうとする」といって囚人たちが看守の態度を非難したように、お互いの間に憎しみを生み出す当局側の具体的な行為を指していた。従って、もちろん、刑務所内部で完全に差別や偏見がなくなったわけではなく、人種やイデオロギーを強調した要求が「人種主義の撤廃」という要求に包摂されてしまったわけでもない。「人種主義の撤廃」は、刑務所内部において、当面の即時的な解決目標となったのである。1つの合意に基づく運動目的に向かって行動を起こす際に、刑務所ではもはや、外部組織の過度の介入も「政治囚」の解放といった急進的なレトリックも必要とされなくなっていた。

一見、人種やイデオロギー的差異を消し去った「囚人同志」の一致団結は囚人間のあらゆる差異を隠蔽した1968年の囚人の一致団結に似たものに見えて、全く異なるものであった。それは、「人種主義」という言葉が具体的中身を持ち、目的が1つとなる過程を経て、黒人囚人たちの状況も1960年代とは異なるものとなってきていたからである。黒人囚人はもはや声を持たない不可視の存在ではなかった。さらにはこれまで刑務所外部運動の常套句は「反体制」であったが、刑務所内部でそれは常にレトリック以上のものであり、且つまた、1970年代に入って「反体制」は具体的に「人種主義を煽る看守」の告発を指した。囚人の間には、人種的、イデオロギー的差異を超えて、レトリックではなく真に当局を非難する連帯意識が醸成されていたのであった。

「失敗」におわったフォルサム・ストライキの要求宣言書は、1971年から始まったニューヨーク州アッティカ刑務所の囚人たちによる刑務所改善運動で使用された。しかし、アッティカ刑務所の囚人たちは、その要求書から黒人の急進派によって提示された要求をすべて削除して、刑務所改善運動を展開した。アッティカ刑務所では黒人囚人数が全囚人数の約半数を占め、運動の先鋒となったアッティカ解放運動派と呼ばれる「囚人の代表者」の半分を黒人囚人が占めたにもかかわらず、急進的なレトリックは一切用いられなかった。彼らは「我々の要求を芝居じみた態度で表明する必要がない」と述べて、運動を「民主的」に展開させることを宣言したのである。

同年9月にアッティカ刑務所で発生した「暴動」は、アッティカ解放運動派の尽力もあり、その展開過程で政治性を帯びた運動へと変化した。囚人たちは「暴動」勃発後2時間足らずで全囚人の半数にあたる1281名を組織化し、囚人同士の話し合いと要求書の作成によって交渉の布石を打った。組織化したその日には既に、実際に要求書の中で指名した立会人との話し合いを実現したのである。さらにはそこでの話し合いの後、囚人たちは当局側の譲歩案を引き出すことにすら成功した。当局側との交渉はすべて記録されるよう、篭城した場所にメディアを招き入れるという念の入れようであった。この過程を経て「暴動」は「民主的」運動へと変化したのであった。

カリフォルニア州の異人種間連帯はアッティカ刑務所「暴動」で「民主的」という言葉で言い換えられた。「政治囚の解放」などレトリックに満ちた要求が削除されていることからも明らかなように、すべての囚人を「代弁」する「代表者」によるアッティカでの運動の「民主的」展開は、現実からの逃避ではなく、刑務所で多数派を占める黒人囚人が被っている人種主義的状況に対する現実的解決を囚人たちが求めていたことを表していたといえよう。

この「暴動」は、5日目に武力鎮圧されたものの、刑務所の暴動史にとって1つの転換点を記していた。これ以後、投獄される囚人が活動家からギャングへ変化したこと、外部社会の政治的運動の衰退による行動モデルの不在、そのことによる囚人の政治性の欠如などによって、刑務所は政治性を欠いた、暴力的な「騒擾」の頻発を経験することとなる。アッティカ刑務所「暴動」はBPM最後の運動だったのであった。

終章　BPMと「黒人公共圏」

以上、アメリカ合衆国における刑務所運動を、黒人の抗議運動と捉え直し、その運動の発展という側面から、刑務所の内と外、刑務所間の関係性という多様な側面を統一的に関連づけて、再検討を行った。特に、本研究では、実証レベルでアメリカにおける研究でも未だ使用されていない史料『バークリー・バーブ』を用いた結果、特に次の3点の新しい事実の発見に至った。

まず1点目に、ブラック・パワー運動とBPMとの関係性を解明することができた。従来、ブラック・パワー運動の囚人への影響という点によってのみ、2つの運動には関係性があるといわれてきた。しかし、2つの運動の関係性は、ブラック・パワー運動が囚人と刑務所運営という刑務所社会全体へ波及したこと、及びそれによって形成された刑務所内の特殊な状況がBPM発生の契機となった、という点にあったことが明らかとなった。黒人囚人はブラック・パワー運動を受容しながらも、ブラック・パワー運動に翻弄されない自生的運動を主体的に展開させたのである。

2点目に、BPMが単なる刑務所改善運動ではなく、黒人運動であったことが明らかとなった。黒人囚人は、一方でブラック・パワー運動の影響によって人種を強く意識し、他方で黒人という人種ゆえに差別的な処遇に直面するという状況にあった。この状況こそは、黒人囚人が異人種間連帯

という、様々な人種から成る囚人の連帯による運動を展開させようとした背景であった。この運動には、次の3つの発展を認めることができた。

まず、異人種間連帯の発展を確認することができた。従来、BPMで達成された異人種間連帯が具体的にはいかなるものであったかは問われず、その変容は見落とされてきたが、ストライキ展開に伴い、異人種間連帯は三段階の発展をみた。異人種間連帯は、1968年2回にわたって行われたストライキでの人種の差異を無視した囚人「連帯」から、1970年サンクエンティン・ストライキで達成された黒人囚人が運動の主たる担い手となった「囚人階級」連帯へ、更には1970年フォルサム刑務所とアッティカ刑務所における人種の差異を自明視した「囚人階級」連帯へと変化したのである。次に、運動目的の発展があった。BPMは、単なる刑務所改善運動から、人種的利害を反映した運動へ、更には刑務所内での人種主義の撤廃を共通目的とした運動へと発展した。最後に、外部運動との関係性に質的発展のあったことが明らかとなった。刑務所の問題を外部社会に可視的にする目的から、囚人にとって外部支援は必要不可欠な条件であった。しかしその後、BPMは外部支援を条件としつつもそれに翻弄されない主体的な運動を形成し、その結果、刑務所内外が自律的な運動を展開させてゆくこととなった。

3点目に、BPMの「黒人公共圏」としての可能性を提示することができた。BPMは、1960年代黒人の連帯意識の基盤ともいうべきブラック・ナショナリズムが高揚する時代に、囚人が自らの人種性を隠蔽することなく、なおかつ異人種に対して排他的にならずに、囚人という「階級」連帯を達成した、アメリカ史の中でも稀有な運動形態の1つであった。これは、黒人囚人が主体となって形成した、人種性によって人々が分断されない政治的な場、すなわち「黒人公共圏」の歴史的形成を表している。

以上のように、BPMを黒人囚人に注目しつつ歴史的に捉えたことによって、BPMが、合衆国の人種関係に決定的な変化をもたらした20世紀半ばの黒人運動の1つとして、自生的展開を見たことが明らかとなった。すなわち、BPMは、白人社会への「統合」を目指した公民権運動と、「民族自決」をスローガンに強固な黒人社会の創設を志したブラック・パワー運動を綜合する性格を持つものだったことが明らかとなったのである。これは、従来の研究のように、各刑務所別、あるいは刑務所の中の運動と外の運動を別々に論じることでは見えてこない点であったといえる。

さらに、本研究は、このアメリカ史上稀有な運動形態を有したBPMを、人種的利害を隠蔽せず、なおかつ人種性によって人々が分断されない「黒人公共圏」として位置づけることで、近年の多文化主義論争に対する批判を提示できたと考える。多文化主義社会においては、人種アイデンティティを強調しすぎることによって自民族中心主義や行き過ぎたアイデンティティ・ポリティクスに陥る危険性がある一方で、合衆国市民という「単一の国民」の分裂を危惧するあまり、様々なアイデンティティがあたかも存在しないかのような手続きがなされる危険性が他方にある。本研究はこの

矛盾を回避した歴史的事例を提示することによって、この解決の方向性をも提示できたと考えるのである。

論文審査結果の要旨

本研究の目的は、1960年代後半から1970年代初頭のアメリカ合衆国の、主としてカリフォルニア州を中心に展開されたブラック・プリズン・ムーブメントと呼ばれる黒人囚人による刑務所改善運動をアメリカ黒人運動史に位置づけ、その意義を検討しようとするものである。

本論文により示された新たな知見は、大きくは3点にわたる。その第1点は、従来関係性があるとされつつも具体的な検討がなされてこなかった、ブラック・パワー運動とブラック・プリズン・ムーブメントの関係について、後者は前者を契機としたものの前者とは一線を画した自生的運動を主体的に展開させた点を実証したことである。

第2点目は、ブラック・プリズン・ムーブメントの理念と実践の発展を実証したことである。1968年のサンクエンティン刑務所における人種の差異を無視した連帯から、1970年に同刑務所で示された黒人囚人が運動の主たる担い手となった「囚人階級」連帯へ、さらに、1970年のフォルサム刑務所と1971年のアッティカ刑務所における、人種の差異を自明視した「囚人階級」連帯への、三段階をたどる異人種間連帯の発展を実証し、この発展とともに運動の目的も単なる刑務所改善から人種的利害を反映した運動へ、そして人種主義の撤廃を共通目的とした運動へと発展していったことを実証したことである。

第3点目は、ブラック・プリズン・ムーブメントの「黒人公共圏」としての性格を実証したことである。囚人が自らの人種性を隠さず、なおかつ異人種に対して排他的にならず、囚人という「階級」連帯を達成したことは、黒人囚人が主体となった人種的分断のない政治の場、すなわち「黒人公共圏」の形成を意味し、ひいては、人種アイデンティティを強調しすぎると国家的統一が危険に陥るという近年の多文化主義に対する批判への具体的反証を提示していると論じている。

本論文は、新たに掘り起こした資料だけではなく、一般的な新聞等、他の資料も傍証として利用できたらその実証密度はさらに高まると考えられ、論考の整理、とりわけブラック・パワー運動との関連づけ、および文章の推敲にもいまだ改善の余地があるものの、多数の新たな資料に基づき、ブラック・プリズン・ムーブメントを当時の黒人運動の重要な一角をなすものと位置づけるという新たな知見を提示することに成功している。

以上に明らかなように、高廣凡子は自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。